千刈狸の呟き

～ 命を食するとは ～

黄 昏 狸

先日、由利本荘の学校の養護の先生たちへの講演で「命といのち」の授業をさせていただきました。その講演のなかで、食育の面から命を食することの話題に触れ、ぜひとも養護の先生と話をしたいと思いました。

講演の中では「豚のＰちゃんと32人の小学生命の授業900日」という映画にもなった話を取り上げたいと考えたのです。

この本のあらすじは、『ある小学校の若い男性教員が、今の子どもは給食に出る豚肉と生きている豚とを同じものとみなすことができないとして、小学３年生に子豚を飼わせ、最後は皆でそれを食べることを計画しました。皆で名前をＰちゃんと名づけました。生徒が６年生となり小学校を卒業するまで、豚はすくすく育ち、体重が300キロを超えました。育てている間に愛情がわき、本来の目的である、殺して食べるということができなくなってしまい・・・。

議論の末、３年生に育ててもらうと一旦は決めたのですが、自分たちではじめたことは自分たちで決着を付けるべきであるし、将来３年生が結局自分たちと同じ悩みを抱えることになる等の理由で再検討となりました。多数決では32名のクラスは16名対16名で３年生に引き続き飼ってもらうという意見と食肉センターに引き取ってもらうという意見に二分されます。結局、担任の先生の判断に委ねるということで全員が一致し、先生は食肉センターに引き取ってもらう決断をしました。殺されるためにトラックで運ばれる「Ｐちゃん」をクラスの生徒は泣きながら追っかけ、別れを惜しんでいくという実話です』。

この話を持ち出して、養護の先生と命とは？人間とはどのような生き物か？ペットと家畜の違いは何か？という討議をしたいと思いました。

しかし、結局は教育倫理、命の授業という意味での賛否両論（むしろ今の時代は保護者の理解が得られない）があるということで講演の中でこの話をしませんでした。

さて、このようなショッキングな授業方法が良いか悪いかは別として、今改めて考えてみると、この若い教員はとても大事なテーマを選択したと思います。この豚のＰちゃんを通して貴重な命の学びを子供たちはしたのだと推測されます。また、ある意味では人間とは他の命をいただいて生かされているということをどのようにして子どもたちに伝えるべきかを考えさせられました。

人間を含む動物は野菜、植物、家畜や海の生き物、つまり生き物の命を奪いとってかろうじて生きていること、ある意味では生かされている存在です。

人が食べ物を食べるということは命をいただくことであり、人間は残酷な存在であることを自覚しなければなりません。

ペットであっても、自然な状態ではなく、人間のエゴで生かしてあるにすぎないのかもしれません。食べるか、生かしておくかも共通しているのは人間のエゴとも言えます。でも、それでも人間は生きるために食べなくてはいけないという宿命があるのです。

私たちは、いま現代の飽食の時代で自分自身が「生きる」という生命維持活動のための最低限の食事ではなく、美味しいものをお腹いっぱい食べ、余ったら捨てるということも普通に日常的にやっております。生きるという授業の中で世界の飢餓の話をした上で、この食育について子どもたちと話し合うことが大変重要です。

ある国で、イスラームの犠牲祭にて神様に牛を捧げ、それを親戚家族や恵まれない方々とも分け合い食すお祭りがあります。前日まで可愛がられていた牛が目の前で絶命し捌かれ、そのお肉を食べる経験によって、文字通り命をいただいて生きていることを自覚するわけです。そして、その命をいただいた自分自身をどう“活かす”のかを更に意識するのだそうです。食を通し、廻る命のリレーバトンを受け取る/受け取らない/選別すると色んな選択肢があることがわかってきます。

今回の豚のＰちゃんの話は死生の教育研究をしている者にとっては、いろんな側面で掘り下げられるテーマだと思います。漢字の命と向きあうこと。平仮名のいのちとはそもそも紡いでいくものであること。いずれにしてもその人の生き方に触れるという意味では、とても大切なことだと思います。

この度、私自身にこのような命やいのちを語る資格があるのかも含めて、この豚のＰちゃんと32人の実話は命の話だけでなく、人間とは何かを問うことや他の命を食さなければ、ひとは命が保てないことを覚悟して生きていかなければいけないことを改めて考えさせられました。